

733-1

昭和十五年

記事編輯上
注意事項

原 安 本 書 類

內務省警保局圖書課

722-4

五頁

一月十二日

圖長課長

事務官

警視廳檢閲課長

各廳府縣特高課長宛通報案

(ブロッコ中心地ヲ經由通達ノコト)

客年十二月二十八日附内務省閣書第六五號ヲ以
テ内務事務官ヨリ地方長官宛通報、支那新中央
政府成立ニ関スル輿論指導要綱送付、件左記第三
項ニ定ムル指導要綱、要旨施時期ハ本月八日發表
ノ事、要旨處理ニ関スル帝國、方途ニ関スル内閣書記
官長從テ以テ實施並ニ無之元、二何可然御取計
相成度

殿

又昨新中央政府成立、閣下與諭指導要綱送附、
 今般内閣、於「決定相成」之標記要綱御參考迄及迷附
 候條左記、諸點將之御留意、一可然御活用相成度
 追而別添「文部新中央政府成立、經緯概要」八法精簡、
 和平運動、新政府樹立工作、經過ヲ明ニスルト共ニ對
 汪工作、重慶政府樹立、軍略々々性質ヲ伴フモノニシテ
 歴代内閣最高、國策上ル所、以テ諒解セシムル趣旨ニシ
 作成セラレタルモノニ有之候モ本文書自體、外部発表
 セラルルコトハ又傳フルヲ以テ之ヲ「秘教」取扱トセバ次第ニ
 付右御念置、上明春迄何致スヘキ「日支新聞關係調整」
 閣下之原則要綱、上共ニ本指導要綱實施ノ參考資料ト
 シ、御利用相成度此段申添候

2

733-6

圖書長

一月六日

李詩言

理手寫

陸軍省情報部甲第少佐電誌

明日朝刊。於平三所開方。至五。不。未。應。已。

兩人。對。之。也。并。自。會。談。得。狀。子。為。戰。元。之。也。

口。上。之。決。定。之。也。自。現。如。子。專。任。所。主。使。之。可。從。

多。在。理。所。以。獨。戰。以。後。六。月。為。二。至。三。會。戰。中。

南。進。之。心。年。記。戰。元。之。意。美。無。之。

進。而。會。戰。自。時。八。在。區。得。狀。之。記。戰。元。之。意。美。無。之。

日。正。午。以。後。獨。戰。已。之。也。口。上。之。取。計。相。對。度。

一、(一) 1945年11月1日，在東京召開之「盟國對日軍事委員會」會議，決定「盟國對日軍事委員會」之組織，並決定「盟國對日軍事委員會」之任務。

二、(二) 1945年11月1日，在東京召開之「盟國對日軍事委員會」會議，決定「盟國對日軍事委員會」之組織，並決定「盟國對日軍事委員會」之任務。

三、(三) 1945年11月1日，在東京召開之「盟國對日軍事委員會」會議，決定「盟國對日軍事委員會」之組織，並決定「盟國對日軍事委員會」之任務。

四、(四) 1945年11月1日，在東京召開之「盟國對日軍事委員會」會議，決定「盟國對日軍事委員會」之組織，並決定「盟國對日軍事委員會」之任務。

中央政治會議ハ國民黨一臨時維新政府一
 蒙古國民黨以外ノ各黨各派無黨無派一合計
 三單位ヲ以テ組織セラル會議ハ過半数又ハ四分三
 以上ノ評決ニ依ル
 開催地點ハ上海トス
 日時ハ未定

四、一月三十日、三十一日汪精衛ヲ中心トスル上海會議ヲ
 催セラル各黨各派ノ協力ヲ要セスル旨ノ通電ヲ發スル旨
 本件ニ関シテハ一月廿九日支那側ヨリ發表スル旨

五、以上ノ件ニ関スル記事取締方針ハ左ノ如クス

- (1) 近ク開催セラルベキ汪精衛ヲ中心トスル上海會議ニ
 関シテハ汪側ヨリ發表アル迄一切記事掲載セザル様
- (2) 中央政治會議開催ノ日時、場所、其ニ組織ノ内容
 等ニ関シテハ汪側ヨリ發表アル迄記事掲載セザル様
- (3) 中央政府ノ名稱、首都、國號ハ二十四日又ハ廿五日ニ
 支那側ヨリ發表アル迄其ノ時解除ノ手續ヲ
 トルコト

警視廳、大阪、愛知、福岡へ參考連絡済

該間九事件ニ付スル新聞記事中取締ヲ要スルモノ

一 殊更ニ國內問題ニ關聯セシメ國內ニ於ケル相剋摩擦ヲ招来セシムル虞アルガ如キ記事

一 海軍、態度ヲ論難シ陸海軍、離間対立、氣運ヲ醸成シ又ハ軍、威信ヲ失墜スル虞アルガ如キ記事

一 外務省、対英強硬態度ヲ以テ軍ニ对内セシメニアリ過キスト爲ス等對外的ニ惡影響ヲ及ボス虞アリト認メラルル記事

一 政府、方針又ハ國內關係、手續其、他裏面事情等ヲ揣摩臆測ニ暴露的ニ取扱ヒ對外的ニ惡影響ヲ及ボス虞アリト認メラルル、記事

一 重臣又ハ政府要路者或ハ英國大使館員、態度ヲ論難シ延テ直接行動ヲ示唆煽動スル虞アルガ如キ記事

蔡元培、李石曾の兩元元重慶脱出

今後の動向監視する

(上海廿六日發同盟) 當地へ達した支那側情報に據れば、重慶政府の元老に――及共勢力の中にと見られてゐた監察委員會常務委員蔡元培及び李石曾の兩名は數日前嚴重なる監視の眼を逃れ突如重慶を脱出昆明に赴いたと謂はれる。兩名は昆明より更に佛印海防を経て香港へ向ふ豫定と謂はれるが、兩名が突如重慶を脱出した事實に重慶側は非常に狼狽と云はれてゐる模様である。蔡、李の兩名は最近も屢々蔣介石に対し極力反共を警告して居り、今回の脱出も蔣が兩名の言を容れぬ爲遂に意を決して最後の途を選んだものと見られ、兩名の今後の行動は注目されてゐる。

浙江財閥の大立物

孔祥熙、又も脱出説

重慶の混乱深刻化

長期抗戦に経年してゐる重慶政府は、我軍の南方輸送路破壊による物資難と抗戦派の極端なる弾壓振りに、人心にかなりの動搖を來し汪政權に心を寄せる和平派の動きが漸次表面化してゐる。蔣介石、陳誠等の首脳部は極度に狼狽してゐる模様である。即ちさきに國府の元老蔡元培、李石曾の重慶脱出あり、重慶に嚴重な警戒網が布かれてゐる所柄、某方面に達した情報によれば財政部長孔祥熙も最近重慶を脱出、分へ向つたといはれる。その真相については未だ確信を得てゐないが、最近の重慶内部情勢及び其他の一般情報を綜合するに大体あり得べき行動と信ぜられてゐる。孔祥熙は蔣介石、宋子文とそれ／＼義兄弟で蔣介石の弗相浙江財閥の大立物であるだけに、その行動は特別の関心が拂はれてゐる。なほ重慶政府最高主脳部間にも共産黨の横暴に快からず起つて和平陣營に投ぜ人との氣隙が相當動いてゐるのを引続き、或は大物の脱出が實現するのではないかとみられ、何れにするも汪精衛氏を中心とする新政權の樹立に伴ひ重慶部内の混乱は益々深刻化する模様である。

三五頁

昭和十五年三月十五日

圖長課長

事務官

理事官

(秘第十五号)

内務省警保局圖書課長

警視廳特高部長

各廳府縣警察部長

宛

新聞記事取締ニ関スル件

近ノ南京ニ於テ開催セラルベキ支那新中央政府樹立
準備、爲、中央政治會議、發表予定事項並ニ檢
閲方針等左、通ニ付 檢閲上参考ニ供セラシ度

記

一 中央政治會議、期日並ニ組織内容ニ付テハ會議開催
前日(本月十九日)南京ニ於テ汪精衛氏ガ内外記者
團ト會見、際談話ト共ニ「中央政治會議、組織要綱
及ビ同條例並ニ委員名簿」ヲ交シ發表スル趣ニ付キ
内地ニ於テハ右發表ヲ俟ツテ記事解禁ヲ爲ス予定
ナリ。

二 新中央政府、名稱樹立、時期、構成等ハ中央政治
會議、議題ナルヲ以テ會議、進行中ニ於テ隨時汪
精衛側ヨリ發表スル趣ニ付 内地ニ於テハ右發表ヲ
記事解禁ヲ爲ス予定ナリ

三 左記、中央政治會議、議題ナルヲ以テ會議、進行中ニ於テ隨時汪精衛側ヨリ發表アル言ニ付キ右發表アル迄、其、内容ヲ掲載シ得ザルモノナリ

(1) 國民政府改組

(2) 中央政治委員會組織條例

(3) 華北政治委員會組織條例

(4) 國民大會、召集及憲政實施ニ關スル事項但し新中央政權、組織内容ニ觸ルル事項一例ハ國民政府、華北政治委員會、名稱、如シ、單ニ項目ト爲發表前、絶対ニ掲載スルヲ得ズ

三月十七日

圖書課長

事務官

理事官

東京八社 大阪三社 愛知及福岡各社

電話 指導案

中央政治會議委員（遷都委員ヲ除ク）、動靜ニ関シ、
「ハ当局發表以外一切（記事、寫眞共）之ヲ新聞
紙ニ掲載セサル様記事編輯上即注意相成度

陸軍省秋山少佐電話（三月十七日午前十時半）

一、支那派遣軍ヨリ「中央政治會議委員（遷都委員ヲ除ク）
、行動ニ関シハ当局發表以外、一切、記事、寫眞、掲
載ヲ禁止セシメ度」旨電報有之ハニ付即予配相煩度
ニ右、内「当局」トハ、汪側及現地軍当局ト解釈セシ度
三、取締、目的ハ南京ニ多數、暗殺團アリ身辺警護
、爲ト思料ス

四、現地ニ於テモ支障アルハ内地ニ通信セシメザル様取
締ラシムルヲトスルモ中央政治會議委員、肩書ヲ用ヒ
又ハ中央政治會議出席、爲ト記載セル者、行動ハ
一切取締ラシ度

右、如キ肩書又ハ用務ヲ記載セザルハ付テハ現地ヨ
リ入リ来タルハ一應差支ナキモ、トシテ却措置相成度
（但し明瞭ニ委員ナルコト判明セムハ不可）

六八頁

昭和十五年五月十日

檢第二八號

圖書課長

事務官

内務省警保局圖書課長

警視廳特高部長

各廳府縣警察部長

宛

新聞記事取締ニ関スル件

貴管下各主要日刊社（警視廳、思想関係新聞雑誌、情報並主要通信ヲ含ム）ニ対シ、左記、通電話指導相成度

記

獨乙單「オランダ」侵入ニ関聯シ我國ガ其關印ニ対シ即時實力ヲ行使スルカ如ク推測セシメ又ハ之ヲ主張スルカ如キ記事ハ一切之ヲ新聞紙ニ掲載セザル様記事編輯上御注意相成度

圖書課長

事務官

理事官

東京十九社 大阪三社 愛知 福岡 各四社電話指導

本日 東亞建設國民聯盟ヲ決定セル時局対策
決議中第二項「更ニ東亞新秩序方針ヲ檢討
シ事裏解決ヲ促進スベシ」ハ之ヲ新聞紙ニ掲
載セザル様記事編輯上御注意相成度

733-18

八九頁

圖書課長

二月一日

事務官

理事官

陸軍省情報部 出淵少佐電話

汪敬要人周佛海、本日 変名ニテ下関市ニ上陸し上
京中ナルガ下関市ニ於テ新聞記者ヲ探知シタル
模様ニテ不掲載方探知セル記者ニ申渡シタル趣キガ
万一他、新聞社ヨリ問合せアリタルトキハ掲載志
スル様指示相成度

追テ目下、處一般ニ周知セラレ居ル模様ナキニ
一般ニ周知セラレタルトキハ、改メテ不掲載方指導、
要アルモノト認メラル

733-19

九百五

圖書目錄

書目

書目

不在此列

學覽

圖書目錄

(不在此列)

本目、不在此列、不在此列、金見、不在此列、不在此列、
可刪除、不在此列、不在此列、不在此列、不在此列、
不在此列、不在此列、不在此列、不在此列、不在此列、
記事編輯上、不在此列、不在此列、不在此列、不在此列、

九四頁續

六月三日米内首相ト記者團ト、會見、際ニ於
首相談中要注意箇所

(1) 日支交渉關係ニ就テ

“訓令ハ近イ内ニ出ル云々”

(差支+)

(2) 重慶工作ニ就テ

“重慶側ト直接キヲ握ルニト、ナイガ汪側ト協
切崩工作ヲ行フ云々”

(差支+)

(3) 事變處理ニ就テ

“第三國ニ利用シ成可ク速リニ收拾シタイ云々”

(不可)

(4) 新政府承認形式ニ就テ

“條約、調印ニヨリ當然承認關係が発生スル云々”

(差支+)

(5) 歐洲大戰不介入方針ニ就テ

“腹案ハ丁ルガ目下、トコニ形勢、推移ヲ見ル、ガ良
イト思フ、將來ニ處スルニ構ハ有ツテ居ル云々”

(差支+)

二頁 読

(6) 歐洲大戰、見透す就す

・英佛、負々テモ屈服セザイヤモ知レズ。屈服スルトモ
後、問題テ永引クト思フ云々。

(首相、觀測トセス。斯ル見方モアル云々、客觀
的、扱ハスル様指示ス)

(7) 米國、海軍予算ニ就す

・米、海軍予算、出鱈目ナル云々。(不可)

も

六月七日

下

理事官

東京 愛知新聞 福岡 西報

電話指導案

「我が国は諸般政府に對し進言中 並に國許
新聞紙 掲載せられ様記事編輯上申注意程成度

記

内閣相進言中

「特ニ最近 外は國際情勢の見透しを誤り 内は産
業經濟の方策宜しきを得ず——長も宸襟を悩
ま——奉らるべしとすむ恐懼に堪へざる所であつて」
及

「内閣に於ても深く進退を考慮せらるる心要ありと信
ず 而して此の際内閣が進退を明にする事は」

談話中

「而も最近 外は國際情勢を對する見透しを誤り 内
は産業經濟を對する方策措置宜敷も得ず
畏くも宸襟を悩ま——奉らるる恐懼に堪へざる所であ
る此の際内閣は進退を明かに——」

皇意課長

事務官

六月十二日

陸軍省 中島少佐
外務省 小室事務官

連絡

理事官

東京八社 大阪三社 愛知四社 福岡四社

非公式 電話 指導案

閣院參謀總長官殿下 並ニ陸軍相ヨリ
ハハハハハニ音相宛「參戰ヲ祝福シ大勝利ヲ祈ル
旨、祝電ニ發セラレタル趣、此一ツ電報ニ付或社
ニ照会ニ付タルガ本件ニ関シテハ陸軍省ヨリ不
載方、申出次第ニ有之、之ヲ新聞紙ニ掲載セ
サル様記事編輯ニ御注意相成度

國語是...
 國語是...
 國語是...

國語是...
 國語是...
 國語是...
 國語是...

國語是...

(國語是...)
 (國語是...)

國語是...
 國語是...
 國語是...

國語是...

1. 關於我國之政治制度
2. 關於我國之經濟制度

國語課本 第四十次

第一單元

第二單元

國語課本 第四十次

國語課本 第四十次

國語課本 第四十次
第一單元
第二單元
第三單元
第四單元
第五單元
第六單元
第七單元
第八單元
第九單元
第十單元

圖書課長

事務官

理事官

五月二十日 收

全國主要日刊社 主要通信、情報通信社ニ
指導案

新内閣、閣僚銓衡ニ関之ニ及對又ハ不滿
、意ヲ表スル等國民ウミ、新内閣ニ對スル不信、
生ズルガ如キ記事ハ時局極大影響ヲリト思料
スラルニ付、之ヲ新聞紙ニ掲載セサル様記事編
輯ニ御注意相成度。

733-427

圖書課長

事務室

理事官

二月二十三日

一 警視廳、大阪、愛知、福岡、兵庫、神奈川

各廳府縣宛電話通牒

近々行ハル、救世軍一斉取締ニ関スル記事ハ昭和
十二年八月七日附通牒、同課行為被疑事件檢
査ニ関スル件、記事差止ニ抵触スルモノニ付檢閲
上時ニ御注意相成度。

圖書課長

九月三日

事務官

理事官

警視廳、大區、愛知、福岡、各府縣檢閲ニ參拜
通牒

狹逸公便スクリ、ハ駐日乃、ハ大使ト打合、要務
ヲ帶ビ近、訪日、赴、ルガ、タニ関スル記事ハ一切掲載セ
サル様、外務省ニ於テ、直接主要新聞社ニ對シ申入
ルニ、タル旨、連絡ナリ、クルニ付、新聞社ヨリ照會等ナリ
タル場合ハ、不掲載ヲ措置相成度。

註、訪日云々、記事ハ勿論、各地通過、動靜
等、一切不可

外務省

情報部長 須磨彌吉郎

内務省

警保局長 藤原孝天殿

獨逸公使 スターツ・ハッセル 新聞記事に

関する件

昨啓陳者獨逸公使 スターツ・ハッセル 氏を經て未詳するの件
は時節柄新聞紙上に大段波に報道せらるるに於て種々面白
からざる結果を招来するの虞あるを以て本省出入の新聞記者團
に對し當局發表最近之れを掲出せざるやう懇談し完全なる諒解
を遂げたるに別添の如く東京八社、大阪二社、の編輯局長
宛た記事掲出を控り依頼し置きたるを以て本府念ふ
冒相成度

大具

昭和十五年九月二日

外務省

情報局長 須磨彌吉郎

DAILY DUTY RECORD — CENSORSHIP DEPT.

Jan. and Feb. 1943

Entry of 17 Feb. 1943

Foundation of Healthy and Strong Soldiers!

School Military Training to be Intensified
Vice-Minister of War, KIMURA's Announcement:

In reply to the question asked by Mr. NAKAGAWA, Hiroshi (/an M.P. for Ibaragi Prefecture/) in a meeting of the Military Service Law Revision Committee of the House of Representatives held on the morning of the 17th - "Is not the military training enforced at present in the middle-grade schools excessive?" Vice-Minister of War KIMURA announced the Army's plan to intensify the school military training in order to meet the demands of the present crisis as follows: -

"Military training is now being carried on in middle-grade schools in accordance with the outlined program of instruction which was discussed and decided upon by the Education and War Departments. In the lower classes, special importance is attached to the cultivation of basic military physical strength, while in the upper classes, basic military training is given for the first time. In the meantime strenuous efforts are being made for the raising of the physical standard, and special attention is being paid to making healthy and strong soldiers of all boys. School military training, I believe, is at present contributing a great deal to the building of character and the cultivation of physical strength.

"In view of the special importance of the education of reserve officer candidates in the Army in the present decisive war, much is expected from the promotion of school military training, which has never been so important as today. In the present situation where almost all boys enter into military service as soon as they finish the courses in their schools, an unprecedented improvement /of the said training/ is necessary to give the boys all preparatory training that fits them for actual conditions. The time spent for this purpose at present, however, is the minimum for the training of those who will be officers of the Imperial Army, therefore the present amount of time is far from sufficient. We firmly believe not only that what is taught in military training has to be implanted in the whole life of the boys but also that if there is any spare time in which the boys are trained in such matters which have no direct connection with war as gymnastics, fencing or judo given in extra hours, then that time must be made use of for the improvement of physical strength, morale and combat training which are directly necessary for fighting."

Doc. 750

昭和十八年二月

其の一

不
秘
要
務
日
誌

検閲課より抜粋

昭和十八年二月十七日（一九四三年）（水曜日）

健兵強兵の基礎！

學校教練を強化

木村陸軍次官の言明

十七日午前開かれた衆議院兵役法改正委員会において中井川浩氏（茨城）より現在の中等學校は軍事教練に偏重する傾向があるとの質疑に対し木村陸軍次官は次の如く時局の要請に基き今後登壇學校教練を強化する方針を闡明した。

中等學校に於ける教練は文部、陸軍両省協議の上教授要目を作成しこれに基づき実施中にして低学年においては特に軍事的基礎體力の錬成を重視し高学年においては初め軍事教練を実施しこの間にふるまひの向上に關しは軍兵中の努力を傾き全生徒より健兵強兵ならしむることに關し特に留意心がある所にして今日學校教練が體育體育に貢獻するに極めて大なるものもあると確信しあり決戦下軍隊における幹部候補生教育の特に重要なる鑑み學校教練の振作に期待するに極めて大にして學校教練の重要なる今日より切實なるはし殊に學生は卒業後砲兵隊等軍務に服する現況においては卒業直後の資格に直ちに役立つためその準備教育に於て遺憾なきを期するべく劃期的向上を要すしかる現にこれに使用し得る時間は國軍幹部たる者の錬成としては取極限にして到底この時間のみを以てしては未だ十分とはいえず教練の成果はこれを生徒の全生活に具現せしむるは勿論課外における體育、武道等の中いやくも直接戦争に關係する事項を演練する餘裕あらは直接戦闘には必要なる體能力の増強、戦技の訓練に精進せしむるものなりと確信する。

Premier KONOYE's Talk Regarding the
Adjustment of Sino-Japanese Relations.

Dec. 22, 1938.

The Japanese government, as has been made clear in repeated statements this year, has constantly looked forward to the complete military annihilation of the anti-Japanese Kuomintang Government, and will strive for the establishment of a new order in East Asia in collaboration with all intelligent people in China who share our feelings. In all regions of China today, the waves of regenerative ardour are rising high, and people are being inspired by the growing feeling for construction. The Government, herewith, wishes to explain, for home and foreign consumption, our fundamental policy in the adjustment of relations with the regenerated new China, and thereby, give a complete exposition of the true intentions of the Empire.

The three nations, Japan, Manchuria, and China, shall unite with the common aim of constructing a new order in East Asia, and shall put into mutual practice the good neighbor policy, the united anti-comintern front, and the economic coalition. For this purpose, it will be necessary for China first of all to liquidate her old, narrow-minded ideas and stop all this anti-Japanese nonsense and her obstinate attitude toward Manchuria. In other words, Japan frankly demands that China will carry on complete relations with Manchuria of its own accord.

Now, as the influence of the Comintern is not allowed to exist in the East-Asia sphere, Japan deems it an essential factor in the adjustment of Sino-Japanese relations, to conclude a Sino-Japanese Anti-Comintern Pact in conformity with the spirit of the Japan-Germany-Italy Anti-Comintern Pact. Therefore, in view of the actual condition presently existing in China, we shall demand recognition of our stationing Japanese troops for anti-Comintern defence in specially designated areas, and designation of the Inner Mongolia regions as a special anti-Comintern area, for the duration of the said pact; in order to fully guarantee our aims for defence against this menace.

Concerning Sino-Japanese economic relations, Japan has no intention whatever of monopolizing the economy of China; and we shall not demand China to restrict the interests of any friendly third power

which understands The New East Asia and is ready to act accordingly. We shall only strive to carry out Sino-Japanese coalition and collaboration. Accordingly, the principle of equality between China and Japan, China shall recognize the freedom of Japanese nationals to reside and trade in the interior of China, thus promoting the economic interests of both peoples. Furthermore, in view of the historic and economic relations between the two countries, we shall demand China to afford Japan definite facilities for the development and utilization of her natural resources, especially in North China and Inner Mongolia.

Above is the general outline of Japan's demands on China. If Japan's true intentions in the movement of a great army are thoroughly understood, it will be evident that what Japan demands of China does not consist of territories, or reparations for war expenditure. What Japan really demands of China is just the minimum security which she needs to execute her function as participator in the construction of a new order. Japan will not only respect the sovereignty of China, but voluntarily abolish the extra-territorial rights needed to complete the independence of China, and will not be averse to giving positive consideration to returning the concessions to China.

TRANSLATION

After CHANG Tso-lin's death, CHANG Kuoh-Liang overpressed more and more the Japanese in Manchuria, cooperating with CHIANG-KAI-SHEK in Central China.

The Japanese people began to be dissatisfied with the inadequate and slow negotiations of the SPIDERER Cabinet for Japan's gains (in Manchuria) that were obtained by the enormous sacrifice of the Russo-Japanese War were being infringed.

Page 1. I think it was about in May 1931 that Lt. Col. HASHIMOTO, and Major CHO, both members of the general staff, determined to establish Japan's foundation in Manchuria, even by force if necessary, to keep the existence of Japan.

(This matter will be cleared if asked of Col. HASHIMOTO).

It might have been the beginning of June that I was told about this determination by Mr. HASHIMOTO and Mr. CHO. Then they demanded of me to try to let the people know of the real condition of Manchuria, and I consented to their offer.

Page 2. So I explained the oppression of Mukden Government over Japanese civilians and asserted the importance of the Manchurian problems in lecture meetings held in about twenty cities in Japan.

Many of other groups also asserted the importance of the Manchurian problems by speech and writing.

My allotted job was only to interest the people in the Manchurian problems. So I did not know and it was not necessary for me to know what negotiations and concrete plans were carried on between the staff of the Kwantung Army and HASHIMOTO, CHO of the general staff in Tokyo.

I was only told by HASHIMOTO and CHO that ITABAKI and ISHIMURA, both staff members of the Kwantung Army, cooperated with them.

Therefore I don't know yet the contents of the concrete plan, nor whether it was planned by the authorities in Manchuria (T.M. the Kwantung Army) or by the consultation between the authorities in Tokyo and Manchuria.

Page 3. But in recent years, I was told the real facts by Lt. Gen. TATEKAWA, Yoshitsugu, a Chief of 2nd Section of General Staff at the time of the Manchurian Incident, as follows:

"The latter part of August, of the 6th year of Showa, (1931) the Foreign Ministry received a telegram from Consul HAYASHI Kyujiro in Mukden, telling that it seemed that the Kwantung Army was making a dangerous scheme. The Foreign Minister discussed the matter with the War Minister, and as a result of an investigation by the War Ministry, it was found that that seemed to be the state of affairs.

After a conference Lt. General TATEKAWA Yoshitsugu was sent to Mukden to order to prevent the plan of the Kwantung Army if it is true. He arrived there in the afternoon of the 17th, but unfortunately he missed the chance to negotiate with the Kwantung Army authorities because of the breaking out of the incident that night or at the dawn of 18 September.

Page 4. At that time not only the Foreign Ministry but the heads of Army Authorities desired to stop fighting and open a diplomatic negotiation lest the incident should be aggravated, but the people supported the operation of the Kwantung Army so vehemently that the Govt. could not control the Kwantung Army.

I think the reason why CHANG Hsueh-Liang oppressed unlawfully the Japanese civilians over there was partly because the party struggle between SEIYU-Party and MINSEI-Party prevented the Japanese Govt. from unifying the policy to such an extent that Japan could not carry out her positive policy in Manchuria, and partly because judging from Japan's attitude after the Washington Conference, he thought that Japan would never take stubborn policies toward Manchuria lest the Britain and U.S.A. should intervene in this problem.

Therefore I don't know yet the contents of the concrete plan, nor whether it was planned by the authorities in Manchuria (T.E. the Kwantung Army) or by the consultation between the authorities in Tokyo and Manchuria.

Page 3. But in recent years, I was told the real facts by Lt. Gen. TATEKAWA, Yoshitsugu, a Chief of 2nd Section of General Staff at the time of the Manchurian Incident, as follows:

"The latter part of August, of the 6th year of Showa, (1931) the Foreign Ministry received a telegram from Consul HAYASHI Kyujiro in Mukden, telling that it seemed that the Kwantung Army was making a dangerous scheme. The Foreign Minister discussed the matter with the War Minister, and as a result of an investigation by the War Ministry, it was found that that seemed to be the state of affairs.

After a conference Lt. General TATEKAWA Yoshitsugu was sent to Mukden to order to prevent the plan of the Kwantung Army if it is true. He arrived there in the afternoon of the 17th, but unfortunately he missed the chance to negotiate with the Kwantung Army authorities because of the breaking out of the incident that night or at the dawn of 18 September.

Page 4. At that time not only the Foreign Ministry but the heads of Army Authorities desired to stop fighting and open a diplomatic negotiation lest the incident should be aggravated, but the people supported the operation of the Kwantung Army so vehemently that the Govt. could not control the Kwantung Army.

I think the reason why CHANG Hsueh-liang oppressed unlawfully the Japanese civilians over there was partly because the party struggle between SEIYU-Party and MINSEI-Party prevented the Japanese Govt. from unifying the policy to such an extent that Japan could not carry out her positive policy in Manchuria, and partly because judging from Japan's attitude after the Washington Conference, he thought that Japan would never take stubborn policies toward Manchuria lest the Britain and U.S.A. should intervene in this problem.
